リレー連載 うえきのちから ～植木が届ける宝物～

緑百色

株式会社ゴバイミドリ　代表取締役　宮田生美（みやたふみ）氏

日本の緑

利休緑、柚葉色、柳色、裏葉柳、柳媒竹、若草色、海松色、松葉色、青白橡、花緑青…。

これらは全て緑の色を表す和言葉です。

染色家の志村ふくみさんは緑の色を「緑はその両界に、生と死のあわいに明滅する色である。この世にあっては生命の色、みどり児の誕生の色なのである。」と記しています。

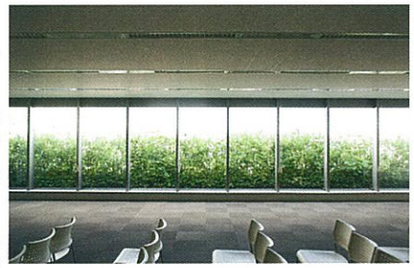
様々な緑が織り成す豊かな表情

水と緑に恵まれた国土にあって、日本人にとって緑は単色ではなく目もあやな多彩な色、季節の巡りと共に移ろう変化（へんげ）の色でありました。

そして、それは命の力を強く印象づける色でもあったと思います。

在来の植物で都市に緑を

５×緑（ゴバイミドリ）は、“里山と連携して、日本の在来の植物で、都市に緑を増やす仕事”をしています。



在来種の混植で緑化したテラス

都市の多くの場所には土がありませんから、植栽基盤をつくるために、金網を用い、保水性の高い軽量土壌を使っています。

在来種を植えるのは、私たちの暮らしから急速に失われる季節感を惜しみ、巡る季節の楽しみやその土地らしさを取り戻したい、と考えたからです。

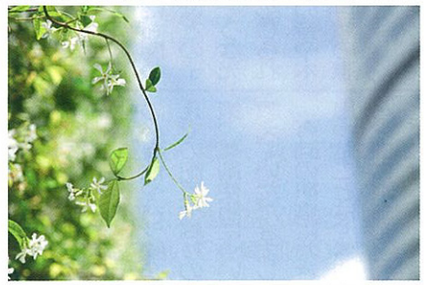
日本の在来種の４分の１近くが絶滅危惧と知って、ささやかながら里山の植生を守るための活動も続けてきました。

５×緑の緑化ユニットは、里山の景色を写すような心もちで、何種類もの木や草を混植しています。

そうして植えられた植物が織りなす表情と美しさには格別のものがあります。

植物によって葉の色も形も様々です。大きな葉っぱ、小さな葉っぱ、細い葉、丸い葉、葉裏の白い葉っぱ、黄色がかった緑、青っぽい緑―植物が風に揺れ、木漏れ日に輝く様にしばし見とれてしまう自分がいます。

こうした経験をするうちに、冒頭にあげたような日本の緑の豊かさにあらためて気づかされました。



ビルの壁面を飾るテイカカズラ

日本人は長い年月に渡って、緑の繊細な変化を見分ける精緻な目と感受性を培ってきたのだろうと思うのです。

このようにして内面化された自然観が、季節の行事となり、俳句や茶道といった文化に昇華していったのではないでしょうか。また、市井の人々の暮らしに色を添える楽しみにもなったことでしょう。

癒しの力

窓の外の植物を眺めていると自然に心が和み、身体がリラックスしているのを感じます。NATIONAL GIOGRAPHIC 5月号「自然と人間」の特集号の中に「自然に癒される―遠くの原野でも自宅の庭でも、自然に近づけば、疲れきった脳がほっと一息つける」という記事が掲載されています。

在来種の混植で緑化したオフィスビル

緑地から１キロ以内に住む都市生活者は、うつ病や不安神経症などの病気の罹患率が低いなどのデータも紹介されています。

人工的で均質な都市空間において、有機的で複雑であり、生長したり変化したりする植物が、人に与える影響は思う以上に大きいのかもしれません。

冬芽がふくらんできた、蕾がほころびはじめた、ドングリが青い実をつけた、鳥や蝶がやってきた、そんなことに気づくのは心楽しいことですし、手の平にのるようなささやかな喜びが、ストレスフルな都市生活をサバイブするのに有効な心の動き方でもあるようです。

そして、そのような心の動き方は、昔の日本人なら誰もが自然に身につけていたこと。だからこそその伝統を忘れずにつないでいきたいと思うのです。

日本の在来植物（緑化ユニットに植栽）

宮田　生美（みやた　ふみ）

1991年から㈱アネックスに所属し、旧住宅都市整備公団（現ＵＲ都市機構）のニュータウン開発など公的セクターの街づくりや地域計画のコンサルティング業務に従事。この中で、ランドスケープデザインや環境計画に携わる。コンサルティングだけではなく実際に街に緑を増やすことを企図して、2003年、５×緑（ゴバイミドリ）プロジェクトを立ち上げ。2013年㈱ゴバイミドリ設立。代表取締役就任。

「ウーマンオブザイヤー2010」受賞